

源氏物語

まぼろし

紫式部

青空文庫

大空の日の光さへつくる世のやうやく

近きこちこそすれ

(晶子)

春の光を御覧になつても、六条院の暗いお気持ちが改まるものでもないのに、表へは新年の賀を申し入れる人たちが続いて参入するのを院はお加減が悪いようにお見せになつて、御簾みすの中にはかりおいでになつた。ひようぶきよう兵部卿の宮のおいでになつた時にだけはお居間のほうでお会いになろうという気持ちにおなりになつて、まず歌をお取り次がせになつた。

わが宿は花もてはやす人もなし何にか春の訪ねたづきつらん

宮は涙ぐんでおしまいになつて、

香をとめて来つるかひなくおほかたの花の便りたよと言ひやなす
べき

と返しを申された。紅梅の木の下を通つて対のほうへ歩いてお
いでになる宮の、御風ふうさい采のなつかしいのを御覧になつても、今
ではこの人以外に紅梅の美と並べてよい人も存在しなくなつたの
であると院はお思いになつた。花はほのかに開いて美しい紅を見

せていた。音楽の遊びをされるのでもなく、常の新春に変わったことばかりであった。

女房なども長く夫人に仕えた者はまだ喪服の濃い色を改めずについて、なお醒^さましがたい悲しみにおぼれていた。他の夫人たちの所へお出かけになることがなくて、院が常にこちらでばかり暮らしておいでになることだけを皆慰めにしていた。これまで執心がおありになるのでもなく、時々情人らしくお扱いになった人たちに対しては独居をあそばすようになってからはかえって冷淡におなりになって、他の人たちへのごとく主従としてお親しみになるだけで、夜もだれかれと幾人も寢室へ侍^{はべ}らせて、御退屈さから夫人の在世中の話などをあそばしたりした。次第に恋愛から超越し

ておしまいになった院は、まだこうした純粹なお心になれなかつた時代に、怨めしうらそうな様子がおおりおり夫人に見えたことなどもお思い出しになつて、なぜ戯れ事にせよ、また運命がしからしめたにせよ、そうした誘惑に自分が打ち勝ちえないで、あの人を苦しめたのであろう、聡明そうめいな人であつたから、十分の理解は持つていながらも、あくまで怨みうらきるといふことはなくて、どの人と交渉の生じた場合にも一度ずつはどうなることかと不安におびえたふうが見えたと院は回顧あそばされて、そうした煩悶はんもんを女によお王うにさせたことを後悔される思いが胸からあふれ出るようにお感じになるのであつた。

そのころのこゝろを見ていた人で、今も残っている女房は少しず

つ当時の夫人の様子を話し出しもした。入道の宮が六条院へ入嫁になった時には、なんら色に出すことをしなかつた夫人であつたが、事に触れて見えた味気ないという気持ちの哀れであつた中にも、雪の降つた夜明けに、戸のあけられるまでを待つ間、身内も冷え切るように思われ、はげしい荒れ模様の空も自分を悲しくしたのであつたが、はいつて行くと、なごやかな気分を見せて迎へながらも、袖が^{そで}ひどく涙でぬれていたのを、隠そうと努めた夫人の美質などを、院は夜通し思い続けておいでになつて、夢にでも十分にその姿を見ることができらるであらうか、どんな世にまためぐり合うことができるのであらうかとばかりあこがれておいでになつた。夜明けに部屋^{へや}へさがつて行く女房なのであらうか、

「まあずいぶん降った雪」

と縁側で言うのが聞こえた。その昔の時のままなようなお気持ちさがされるのであつたが、夫人は御横にいなかった。なんという寂しいことであらうと院は思召おぼしめした。

うき世にはゆき消えなんと思ひつつ思ひのほかになほぞ程経ほどふる

こうした時を何かによつて紛らわしておいでになる院は、すぐに召し寄せて手水ちようずをお使いになつた。女房たちは埋うづんでおいた火を起し出して火鉢ひばちをおそばへおあげするのであつた。中納言

の君や中將の君はお居間に来てお話し相手を勤めた。

「^{ひと}独り寝^ねがなんともいえないほど寂しく思われる夜だった。これでも安んじていられる自分なのに、つまらぬ関係をたくさんに作ってきたものだ」

とめいったふうに院は言っておいになった。自分までもここを捨てて行つたなら、この人たちはどんなに憂鬱^{ゆううつ}になるだろうなどとお思ひになつて、居間の中がお見渡されになるのであつた。目だたぬように仏勤めをあそばして、経をお読みになる声を聞いていては、ただの場合でも涙の流れるものであるのに、まして院のお悲しみに深い同情を寄せている女房たちであつたから、痛切においたましく思われた。

「この世のことではあまり不足を感じなくともよいはずの身分に生まれていながら、だれよりも不幸であると思わなければならぬことが絶えず周囲に起こってくる。これは自分に人生のはかなさを体験すべく仏がお計らいになるのだと思われる。それをしいて知らぬ顔にしてきたものだから、こうして命の終わりも近い時になつて、最も悲しい経験をすることになつたのだ。これで負つて来た業も果^{ごう}たせた気がして、安らかな境地が自分の心にできて、執着の残るものもない私だが、あなたたちと以前よりも、より親密にして数か月を暮らしてきたことで、あなたたちとの別れにもう一度心が乱れないかという不安が自分にできてきた。弱い私の心じゃないか」

とお言いになって、目をおおさえになるふうをしてお紛らしになろうとするにもかかわらず、院のお涙のこぼれるのを見る女房たちは、ましてとめどもなく泣かれるのであった。そうしていよいよ院が見捨てておしまいになることの歎なげかわしさをだれも訴えたいのであるが、言い出しうる者もなかった。皆むせ返っていたからである。こんなふうに歎きに明かしておしまいになる朝、物思いに一日をお暮らしになった夕方などのしんみりとした時間には、愛人関係が以前あった人たちを居間に集めて語り合うのを慰めにあそばす院でおありになった。

中将の君というのはまだ小さい時から夫人に仕えてきた人であったが、院はいつとなく無関心でありえなくおなりになったか情

人にしておしまいになったのを、彼女は夫人に対して自責の念に堪えないで、院の愛の手を避けるようにばかりしていたが、夫人の歿後ぼつごは愛欲を離れて、だれよりもすぐれて故人の愛していた女房であつたと思われになることによつて、形見と見てこの人に院は愛を持つておいでになつた。性質も容貌ようぼうも皆よくて、喪服姿がうない松に似た可憐かれんな女である。親しくない女房には顔もありお見せにならないこのごろの院でおありになつた。お近しくした高官たちとか、御兄弟の宮がたとかは始終たずお訪ねされるのであるがあまり御面会になることもない。人と逢あつてゐる時だけはよく自制して醜態を見せまいとしても、長く悲しみに浸つていてぼけた自分がどんなあやまちを客の前でしてしまふかもしれぬ、

そうしたことがのちに語り伝えられることはいやである、歎き疲れて人に逢うこともできないと言われるのも、恥ずかしいことは同じであるが、話だけで想像されることよりも實際人の目で見られたことの噂うわさになるほうが迷惑になるとお思ひになって、大將などもにも御簾みす越しでしかお逢いにならなかつた。こんなふうには悲歎に心が顛てんとう倒したように人が言うであらう間を静かに過ごしてから、と出家の日をお思ひになって、まだ人間の中をお去りになることをされないのであつた。

他の夫人たちの所へ稀まれにおいでになることがあつても、そこでその人々が紫の女王でないことから新しいお悲しみが心に湧わいて涙ばかりが流れるのをみずからお恥じになつてどちらへももう出

かけられることがなくなっていた。中宮ちゆうぐうは御所へお入れになつたのであるが、三の宮だけは寂しさのお慰めにここへとどめてお置きになつた。

「お祖母様ぼあがおつしやつたから」

とお言いになつて、宮は対の前の紅梅と桜を責任があるように見まわつておいでになるのを、院は哀れに思召おぼしめした。

二月になると、花の木が盛りなものも、まだ早いのも、梢こずえが皆霞かすんで見える中に、女王の形見の紅梅うぐいすに鶯うぐいすが来てはなやかに啼なくのを、院は縁へ出てながめておいでになつた。

植ゑて見し花の主人あるじもなき宿に知らず顔にて来居る鶯

春の空を仰いで吐息といきをおつかれになつた。

春が深くなつていくにしたがつて庭の木立ちが昔の色を皆備えてお胸を痛くするばかりであつたから、この世でもないほどに遠くて、鳥の声もせぬ山奥へはいりたくばかり院はお思いになるのであつた。山吹の咲き誇つた盛りの花も涙のような露にぬれているところばかりがお目についた。よそでは一重桜が散り、八重の盛りが過ぎてかぼせくら 桜が咲き、ふじ 藤はそのあとで紫を伸べるのが春の順序であるが、この庭は花の遅速を巧みに利用して、散り過ぎた梢はあとの花が隠してしまうように女王がしてあつたために、いつまでも光る春がとどまっているようなのである。若宮が、

「私の桜がとうとう咲いた。いつまでも散らしたくないな。木のまわりにきちよう几帳を立てて、切れを垂たれておいたら風も寄つて来ないだろうと思う」

たいした発明をされたようにこう言っておいでになる顔のお美しさに院も微笑をあそばした。

「覆おおうばかりの袖そでがほしいと歌った人よりも宮の考えのほうが合理的だね」

などとお言いになって、この宮だけを相手にして院は暮らしておいでになるのであった。

「あなたと仲よくしていることも、もう長くはないのですよ。私の命はまだあつても、絶対にお逢いすることができなくなるので

す」

とまた院は涙ぐんでお言いになるのを、宮は悲しくお思いになつて、

「お祖母様のおつしやつたことと同じことをなぜおつしやるの、不吉ですよ、お祖父様」

と言つて、顔を下に伏せて御自身の袖などを手で引き出したりして涙を宮はお隠しになつていた。欄干の隅すみの所へ院はおよりかかりになつて、庭をも御簾みすの中をもながめておいでになつた。女房の中にはまだ喪服を着ているのがあつた。普通の服を着ているのも、皆派手はでな色彩を避けていた。院御自身の直衣のうしも色は普通のものであるが、わざとじみな無地なのを着けておいでになるので

あつた。座敷の中の装飾なども簡素になつていて目に寂しい。

今はとて荒し^{あら}やはてん亡^なき人の心とどめし春の垣^{かき}根^ねを

とお歌いになる院は真心からお悲しそうであつた。

徒然^{とぜん}さに院は入道の宮の御殿へおいでになつた。若宮も人に抱かれて従つておいでになつて、こちらの若宮といつしよに走りまわつてお遊びになるのであつた。花の木をおいたわりになる責任もお忘れになるくらいにおふぎけになつた。

尼宮は仏前で経を読んでおいでになつた。たいした信仰によつておはいりになつた道でもなかつたが、人生になんらの不安もお

感じになるものもなくて、余裕のある御身分であるために、専心に仏勤めがおできになり、その他のことにいつさい無関心でおいでになる御様子のお見えるのを院はうらやましく思召した。こうした浅い動機で仏の御弟子でしになられた方にも劣る自分であると残念にお思いになるのである。闕伽あかだな棚に置かれた花に夕日が照って美しいのを御覧になって、

「春の好きだった人の亡くなってからは、庭の花も情けなくばかり見えるのですが、こうした仏にお供えしてある花には好意が持たれますよ」

とお言いになった院は、また、

「対の前の山吹やまぶきはほかでは見られない山吹ですよ、花の房ふさなど

がずいぶん大きいのですよ。品よく咲こうなどは思っていない花と見えますが、にぎやかな派手はでなほうではすぐれたものですね。植えた人がいない春だとも知らずに例年よりもまたきれいに咲いているのが哀れに思われます」

と仰せられた。宮はお返辞に、

「谷には春も」（光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散るもの思もひもなし）

とお言いになるのであった。言うこともほかにありそうなものを自分の悲しみを嘲ちやうしやう笑するにあたるようなことをお言いになるとはと院は心に思おぼしめ召しながらも、紫の女王はこうした思いやりのないことを言い出すこともすることも最後まで絶対でない女

性であつたと、少女時代からの故夫人のことを追想してごらんになると、その時はこう、あの時はこうと、才氣と貴女らしい匂いにおの多かつた性格、容姿、言つた言葉などばかりがお思われになつて、涙のこぼれてきたのを院はお恥じになつた。

夕方の霞かすみが物をおぼろに見せる美しい時間であつたから、院はそこからすぐ明石夫人あかしの住居すまいをお訪ねたずになつた。久しくおいでがなかつたのであるから突然なことに夫人は驚いたのであつたが、すぐに感じよく席を設けてお迎えするようなところに、この人のだれよりも伶俐れいりな性質は見えるものの、また故人はこうでもない高雅な上品さがあつたと思ひ比べられては、その幻ばかりが追われるようにおなりになつて、悲しみがさらにまさつてくるのを、

院は御自身ながらどうすれば慰む心であろうと苦しく思召した。

こちらでは落ち着いて昔の話などを院はしておいでになった。

「人をあまりに愛することは結果のよくないものだ、私は昔から知っていたし、またそのほかのことにも執着心がこの世に残らぬようにと心がけていて、一時逆境に置かれたころなどは、いろいろな理想もこの世に持ったと言つても、それは実現性のないことにきめて、どんな野山の果てで自分の命を果たしてしまつても惜しいものもないとだけは思えたものだが、年がいつて死期が近づくころになつて、いろいろな係累をふやすことになつたために、今まで出家も遂げることができないでいるのが自分で齒がゆくてならない」

などと院はお言いになつて、夫人と死別したばかりの悲しみでないように言つておいでになるが、明石の心には院の御内心は何によつて苦しんでおいでになるかはよくわかつていて、道理なことであるとおいたわしく思った。

「他人から見まして、この世に未練の残るわけもないような人も、その人自身には捨てられない絆ほだしが幾つもあるものなのでございませうから、ましてあなた様などがどうしてそう楽々と遁とんせい世の道をおとりになることがおできになれましよう。深い考えもなく出家をいたす者はあとで見苦しいことも起こして、かえつてそうならねばよかつたように世間から申されることもあるものでございませうから、道におはいりになりますことをお急ぎにならずにおいで

になりますのが、あとでごりつぱな悟りをお得えになる過程になるかと存ぜられます。昔の例を承りましても、突然心の傷つけられますような悲しみにあいますとか、大きな失望をいたしましたとか申すような時に厭えんせい世的せいになつて出家をいたすと申すことはあまりほめられないことになっているではございませんか。もうしばらく御発ほっしん心をお延ばしになりました、宮様がたも大人におなりになり御不安なことなどはいつさいないころまで、このままで御家族に動揺をお与えあそばさないようにしていただければうれしかろうと存じます」

などとまじめに言っている明石に院は好感をお持ちになることができた。

「そんなになるまで待つていることが思慮深いのだったら、それよりもあさはかなほうがましなようだね」

などとお言いになって、昔から悲しいことに多くあつておいでになった話もあそばされた。

「昔、中宮がお崩れかくになった春には、桜が咲いたのを見ても、

『野べの桜し心あらば』（深草の野べの桜し心あらば今年ばかりは墨染めに咲け）と思われたものですよ。それはごりっぱな方であることが小さいころから心にしみ込んでいたために、お崩れになった時にも私がだれよりもすぐれて悲しかったのです。恋愛の深さ浅さと故人を惜しむ情とは別なものだと思う。長く同棲どうせいした妻に別れて、病的にまで悲しんで、その人が忘れられないのも

恋愛の点ばかりでそうなのではありませんよ。少女時代から自分が育て上げてきた人といっしょに年をとってしまつた今になつて、一人だけが残されて一方が亡くなつてしまつたということが、みずから憐あわれまれもし、故人を悲しまれもして、その時あの時と、あの人の感情の美しさの現われた時とかあの人の芸術とか複雑にいろいろなことが思わせられるために、深い哀愁に落ちていくので「す」

などと、夜がふけるまで、昔をも今をも話しておいでになつて、このまま明石夫人のところまで泊まつていつてもよい夜であるがとはお思いになりながら院のお帰りになるのを見て、明石夫人はいちまつ抹ちまつの物足りなさを感じたに違いない。院も御自身のことではあ

るが、怪しく変わってしまった心であるとお思いになった。

お帰りになるとまた仏勤めをあそばして夜中ごろに昼のお居間で仮かり臥ぶしのようにしてお寝やすみになった。

翌朝早く院は明石あかし夫人へ手紙をお書きになった。

泣く泣くも帰りにしかな仮の世はいづくもつひのとこよなら

ぬに

という歌であつた。昨夜ゆうべの院のお仕打ちは恨めしかつたのであるが、こんなふうに別人であるように悲しみに疲れておいでになる御様子を思つては自身のことはさしおいて明石は涙ぐまれるの

であつた。

かりがゐし苗代水の絶えしよりうつりし花の影をだに見ず

いつも変わらぬ明石の返歌の美しい字を御覧になつても、この人を無礼なちんにゆうしや闖入者ちんのように初めは思っていた女王が、近年になつて互いに友情を持ち合うようになり、自尊心を傷つけない程度の交わりをしていたのであるが、明石はそれとも気がつかかなかつたであらうなどとも院は来し方のことを思つておいでになつた。お寂しくてならぬ時にだけは明石夫人のその場合のような簡単な訪問を夫人たちの所へあそばされる院でおありになつた。さいしよ妻

妾うと夜を共にあそばすようなことはどこでもないのである。

夏の更ころもがえ衣はなちるさとに花散里夫人からお召し物が奉られた。

夏ごろもたちかへてける今日ばかり古き思ひもすすみやはする

この歌が添えられてあつた。お返事、

羽衣のうすきにかはる今日よりは空うっせみ蝉せみの世ぞいとど悲しき

賀かも茂祭りの日につれづれで、

「今日は祭りの行列を見に出ようと思つて世間ではだれも興奮を
しているだろう」

こんなことをお言いになつて、賀茂の社前の光景を目に描いて
おいでになつた。

「女房たちは皆寂しいだろう、実家のほうへ行つて、そこから見
物に出ればいい」

などとも言つておいでになつた。中将の君が東の座敷でうたた
寝しているそばへ院が寄つてお行きになると、美しい小柄な中将
の君は起き上がった。赤くなつてゐる顔を恥じて隠しているが、
少し癪づいてふくれた髪はの横まに見えるのがはなやかに見えた。紅
の黄はがちな色の袴はかまをはき、単衣ひとえも萱草かんぞう色いろを着て、濃にい鈍び色いろに黒

を重ねた喪服に、裳もや唐衣からぎぬも脱いでいたのを、中將はにわか
上へ引き掛けたりしていた。葵あおいの横に置かれてあつたのを院は手
にお取りになつて、

「何という草だったかね。名も忘れてしまったよ」

とお言いになると、

さもこそは寄るべの水に水草みぐさゐめ今日のかざしよ名さへ忘
る

と恥じらいながら中將は言つた。そうであつたと哀れにお思
になつて、

おほかたは思ひ捨ててし世なれどもあふひはなほやつみおか
すべき

こんなこともお言いになり、なおこの人にだけは聖ひじりの心持ちに
もなれず、行為もお見せになることはおできにならないのであつ
た。

五月雨さみだれの薄暗い世界の中では物思いを続けておいでになるばか
りの院は、寂しかったが十幾日かの月がふと雲間から現われた珍
しい夜に大将が御前に来ていた。花橘たちばなの木が月の光のもとにあざ
やかに立って薫かおりも風に付いておりおりはいつてきた。「千世を

ならせる」というこれと深い関係の杜鵑ほととぎすが啼なげばよいと待っているうちに、にわかわかに雲が湧わき出してきて、はげしく雨の降るのに添つって吹き出した風のために、燈籠とうろうの灯ひも消えそうになつて、空の暗さが深く思われる時に「蕭蕭せうせう暗雨打窓声あんうまどをうつこゑ」などと、珍しい詩ではないが院のお歌いになる美声をお聞きすると、恋を解する女に聞かしむべきものであると惜しまれた。

「独身生活というものは、私一人が経験しているものでもないが、怪しいほど寂しいものだ。山へはいつてしまふ前にこうして習慣をつけておくことは非常によいことだと思ふ」

などと院はお言いになつて、

「女房たち、ここへ菓子でも出すがよい。男たちに命じるほどの

ことでもないから」

などとも気をつけておいでになった。夕霧は空をおながめになる院の寂しい御表情を見て、こんなふういつまでもいつまでも故人を悲しんでおいでになつては、出家をされても透徹した信仰におはいりになることはむずかしくはないかと思つていた。

ほのかな隙見すきみをしただけの面影すら忘られないのであるからまして院が女王のためのお悲しみの深さは道理至極であると言わねばならぬと同情も申していた。

「昨日か今日のことのように思つておりますうちに御一周忌にももう近づいてまいります。御法事はどんなふうにあそばすおつもりでございますか」

と大将が言うのと、

「何も普通と違つたことをしようと思つていない。女王が作らせたままになっている極樂の曼陀羅まんだらをその節に供養すればいいことと思う。書いておいた経もたくさんあるはずなのだが、某僧都は故人からどうするかをよく聞いてあるようだから、それに加えてすることも皆僧都の意見によることにしようと思う」

と院は仰せられた。

「御自身の御法要についてのことまでもお仕度したくをあそばしておかれましたことは、お考え深いことでしたが、お二方の上で申しますと、この世での御縁は短かつたのですから、せめて形見になる人をお残しくだすつたらと存じますと残念でございます」

「しかし子は早く死なずに現存している妻のほうにも少なかつたのだからね。私自身が子は少なくしか持てない宿命だったのだらう。あなたによつて子孫を広げてもらえばいい」

などと院はお言いになるのであつて、何につけても忍びがたい悲しみの外へ誘い出されることをお恐れになり、故人のこともあまりお話しにならぬうちに、「いにしへのこと語らへばほととぎす時鳥ほととぎすいかに知りてか古声ふるこゑに啼なく」と言いたいような杜ほととぎす鵲ほととぎすが啼いた。待たれていた声なのであるが、

亡なき人を忍よひぶる宵むらさめの村雨ぬに濡ぬれてや来むらさめつる山ほととぎすほととぎす

前よりもいつそう悲しいまなざしで空を院はおながめになった。
夕霧は、

郭ほととぎす 公君につてなん古さとの花橘たちばなは今盛りぞと

と歌った。この時に女房たちもそれぞれ歌を詠よんだのであるが
ここには省はいておく。

大将はそのまま宿直とのいすることにした。御独居生活の心苦しさに
時々夕霧はこうしておそばで泊とまってゆくのであるが、紫の女王
のいたころにはたやすく近い所へも寄よることを院はお許しになら
なかつた帳台のかたわらに寝ることによつても、大将は昔が今に

ならぬことを悲しんだ。

暑いころに涼しい水亭すいていに出て院がながめておいでになる池には、蓮はすの花が盛りに咲いていた。恋しい人への追懐のためにこの花の前にもうつろな気持ちを感じておいでになるうちに、日も暮れに近くなった。はなやかに鯛ひぐらしの鳴く声を聞きながら、撫子なでしこが夕映ゆうばえの空の美しい光を受けている庭もただ一人見ておいでになることは味気ないことでおありになった。

な つれづれとわが泣き暮らす夏の日をかごとがましき虫の声か

ほたる
 蛍が多く飛びかうのにも、「夕せきでん殿に蛍飛んで思ひせうぜん悄然」な
 どと、お口に上る詩も楊妃ようひに別れた玄宗の悲しみをいうものであ
 った。

夜を知る蛍を見ても悲しきは時ぞともなき思ひなりけり

七月七日も例年になつた七たなばた夕たなばたで、音楽の遊びも行なわれず
 に、寂しい退屈さをただお感じになる日になつた。星合いの空を
 ながめに出る女房もなかつた。

未明に一人ぶ臥しの床をお離れになつて妻戸をお押しあけになる
 と、前庭の草木の露の一面に光っているのが、渡わた殿どののほうの入

り口越しに見えた。縁の外へお出になつて、

七夕の逢あふ瀬は雲のよそに見て別れの庭の露ぞ置き添ふ

こう口ずさんでおいでになつた。

秋風らしい風の吹き始めるころからは法事の仕度したくのために、院のお悲しみも少し紛まれていた。あれから一年たったかとお思おいになると呆ぼう然ぜんともおなりになるのである。命日である十四日には上から下まで六条院の中の人々は精進潔斎して、曼陀羅まんだらの供養くやうに列するのであつた。例の宵よいの仏前のお勤めのために手水ちゆうずを差し上げる役にあつた中將の君の扇に、

君恋ふる涙ははてもなきものを今日をば何のはてといふらん

と書かれてあつたのを、手に取つてお読みになつてから、院が
またその横へ、

人恋ふるわが身も末になりゆけど残り多かる涙なりけり

とお書き添きえになつた。

九月になり被きせ綿わたをした菊を御覧になつて、

もろともにおきゐし菊の朝露もひとり袂たもとにかかる秋かな

と院はお歌いになつた。

十月は時雨しぐれがちな季節であつたからいつそう院のお心はお寂し
そうで、夕方の空の色なども言いようもなく心細く御覧になるの
であつて、「いつも時雨は降りしかど」（かく袖そでひづるをりはな
かりき）などと口ずさんでおいでになつた。空を渡る雁かりが翼を並
べて行くのもうらやましくお見守られになるのである。

大空を通ふまぼろし夢にだに見えこぬ魂たまの行く方尋ねよへ

何によつても慰められぬ月日がたつていくにしたがい、院のお
悲しみは深くばかりになつた。

五節ごせちなどといつて、世の中がはなやかに明るくなるころ、大将
の子息たちが殿上勤めにはじめて出たといつて、六条院へ来た。

二人とも非常に美しい。母方の叔父おじである頭中將とうちゅうや蔵人くらうど少將な
どが青摺あおずりの小忌衣おみころものきれいな姿で少年たちに付き添つて来た

のである。朗らかなふうのこうした若い人たちを御覧になる院は、
御自身の青春の日もお振り返られになつて昔のこの日の舞い姫に
心をお惹ひかれになつたことなどもさすがになつかしいこととお思
い出しになつた。

宮人は豊とよの明りにいそぐ今日けふ日かげも知らで暮らしつるかな

今年をこんなふうに隠忍してお通しになった院は、もう次の春になれば出家を實現させてよいわけであるとその用意を少しずつ始めようとされるのであったが、物哀れなお気持ちばかりがされた。院内の人々にもそれぞれ等差をつけて物を与えておいでになるのであった。目だつほどに今日までの御生活に区切りをつけるようなことにはしてお見せにならないのであるが、近くお仕えする人たちには、院が出家の実行を期しておいでになることがうかがえて、今年の終わってしまうことを非常に心細くだれも思つた。人の目については不都合であると思ひになつた古い恋愛關係の

手紙類をなお破るのは惜しい気があそばされたのか、だれのも少しずつ残してお置きになったのを、何かの時にお見つけになり破らせなどして、また改めて始末をしにおかかりになったのであるが、須磨すまの幽居時代に方々から送られた手紙などもあるうちに、紫の女王によおうのだけは別に一束になっていた。御自身がしてお置きのようになったのであるが、古い昔のことであつたと前の世のことのようにお思われになりながらも、中をあけてお読みになると、今書かれたもののように、夫人の墨の跡が生き生きとしていた。これは永久に形見として見るによいものであると思召おほしめされたが、こんなものも見てならぬ身の上になろうとするのでないかと、気がおつきになって、親しい女房二、三人をお招きになって、居間の

中でお破らせになった。こんな場合でなくても、亡なくなった人の手紙を目に見ることは悲しいものであるのに、いつさいの感情を滅却させねばならぬ世界へ踏み入ろうとあそばす前の院のお心に女王の文字がどれほどはげしい悲しみをもたらしたかは御想像申し上げられることである。御気分はくらくらくなって涙は昔の墨の跡に添って流れるのが、女房たちの手前もきまり悪く恥ずかしくおなりになって、古手紙を少し前方へ押しやって、

死出の山越えにし人を慕ふとて跡を見つつもなほまどふかな

と仰せられた。女房たちも御遠慮がされてくわしく読むことは

できないのであったが、端々の文字の少しずつわかっていくだけ
さえも非常に悲しかった。同じ世にいて、近い所に別れ別れにな
っている悲しみを、実感のままに書かれてある故人の文章が、そ
の当時以上に今のお心を打つのは道理なことである。こんなにも
めしく悲しんで自分は見苦しいとお思いいなつて、よくもお読み
にならないで長く書かれた女王の手紙の横に、

かきつめて見るもかひなし藻塩草もしほぐさ同じ雲井の煙とをなれ

とお書きになつて、それも皆焼かせておしまいになつた。

仏名の僧を迎える行事も今年きりのことであるとお思いいなる

と、僧の錫杖しやくじょうの音も身に沁しんでお聞かれになった。院のために行く末長く寿命の保たれることを僧たちの祈り唱えるのも、院のお心には仏へ恥ちずかしくお思われになった。雪が大降りになつて厚く積もつた。帰ろうとする導師を院は御前へお呼びになつて、杯を賜わつたりすることなども普通の仏名式の日以上の手厚いおねぎらいであつた。纏頭てんとうなども賜わつた。長くこの院へお出入りし、御所の御用も勤めているお馴染なじみ深い僧が、頭の色もようやく変わつて老法師になつた姿も院には哀れにお思われになるのであつた。この日も例の宮がた、高官たちが多数に参入した。梅の花の少し花らしく顔を上げ出したのが、雪の中にきわだつて美しく見える日であつたから、音楽の遊びもあつてしかるべきなの

であるが、本年中はなお管絃かんげんもむせび泣きの声をたてるもののように思召されるお心から、そのことはなくて、詩歌を歌わせてお聞きになるくらいのことだとどめられた。導師へ院が杯をおさしになった時のお歌は、

春までの命も知らず雪のうちに色づく梅を今日かざしてん

というのであって、お返し、

千代の春見るべきものと祈りおきてわが身ぞ雪とともにふりぬる

参会者の作も多かつたが省いておく。院の御美貌びぼうは昔の光源氏
でおありになった時よりもさらに光彩が添ってお見えになるのを
仰いで、この老いた僧はとめどなく涙を流した。

今年が終わることを心細く思召す院であつたから、若宮が、

「なやら難追いをするのに、何を投げさせたらいちばん高い音がするだ
ろう」

などと言って、お走り歩きになるのを御覧になつても、このか
わいい人も見られぬ生活にはいるのであるとお思いになるのがお
寂しかった。

物思ふと過ぐる月日も知らぬまに年もわが世も今日や尽きぬ
る

元日の参賀の客のためにことにはなやかな仕度したくを院はさせてお
いでになった。親王がた、大臣たちへのお贈り物、それ以下の人
たちへの纏頭てんとうの品などもきわめてりっぱなものを用意させてお
いでになった。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2004年2月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

まぼろし

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>